ダーナ
浄土宗平和協会会報 VOL. 29
Dana
「ダーナ」とはサンスクリット語で、[布施]の意。
ダーナ●第29号
発行日●平成28年12月27日
編集／発行●浄土宗平和協会（JPA）
発行人●川副春海
Jodo Shu Peace Association

川副春海理事長に聞く
六人に一人が「相対的貧困層」に日本の貧困問題を考える

「貧困」は国・地域、機関によってさまざまな定義があるが、大きく「絶対的貧困」と「相対的貧困」の二つの概念がある。

現在、一般に知られている「絶対的貧困」の定義は世界銀行によるもので、かつては1993年の購買力平価換算で一日あたりの生活費1ドル未満で生活している人を絶対的貧困層と定義していたが、2008年に一日1.25ドルに改訂した。要は、生きるにあたり最低限必要と考えられている食料や生活必需品を購入するためのお金がない状況を「絶対的貧困」といい、主に途上国での貧困問題を論ずるときの概念である。

対して先進国での貧困問題については、「相対的貧困率」という概念で論じられる。国の全人口の所得の中央値の半分を下回る人の割合のことで、その国の所得格差を表している数字だと言われる。

川副春海理事長

所得の中央値の半分を下回る層は「相対的貧困層」と言われ、日本でいえば、一人所帯手取月収10.4万円以下のものが当てはまる。平成25年の国民生活基礎調査によると、わが国ではこういう層が16.1％、つまり６人に一人いることになる。相対的に裕福な国が加盟する経済協力開発機構（ＯＥＣＤ）加盟36カ国のうち下から４位というから深刻だ。

相対的貧困率が高いということは、所得格差がより大きいということだ。一億総中流と言われ、終身雇用の時代だった70年代までが、幸福な時代だったのかもしれない。それ以降の新自由主義的改革が、いつの間にかこんな格差を生み出したともいわれている。

その中でも最も危うさをはらんでいるものは、子どもの貧困という問題であろう。これも全体の相対的貧困率とそう変わらず16.3％、18歳未満の子どもの６人に一人が、貧困に苦しんでいる。それは貧困の再生産ということにもつながる。貧困家庭の子どもが、十分に学べずに、やがて貧困層になっていく。一度貧困になったら何代も貧困に苦しむということだ。

この国の所得再分配政策は効率が悪く、子どもたちの貧困解消になっていない。社会保障の多くが幅広い高齢者向けで、本当に困っている高齢者や若者、子どもに向かっていない。2013年予算ベースでは社会保障給付110.6兆円のうち、子ども・子育てにはわずか4.8兆円のみの割り当てだ。

浄土宗平和協会は、これまで20年以上、海外で活躍する日本のＮＧＯを支援してきたが、来年からこうした子どもの貧困や格差社会是正などの活動を行う民間ＮＰＯの支援にも乗り出す。今どんな枠組みで援助するのか、検討中である。

39名の受賞者に希望図書を贈る
～ブック・ギフト授与式を3ヶ所で実施～

ブック・ギフト活動は、浄土宗平和協会（ＪＰＡ）の主要な活動の一つで、今年も東京、関西（京都）、名古屋地区で実施された。東京都、愛知県、関西圏の大学に通学する私費留学生に、日本語でレポートを書けば、1万５千円以内の希望する図書を受領できるというもので、12月上旬に、東京（大本山増上寺）、名古屋（建中寺＝名古屋市東区）、関西（大本山百万遍知恩寺）の3カ所で、それぞれ授与式が行われた。希望図書を授与された学生は、3会場で合計39人、嬉しそうに受け取る姿が印象的だった。本年度の応募の条件である作文のテーマは、「日本に来て思うこと」。外国人とは思えない流ちょうな日本語で書かれたレポートが集まった。

12月４日に贈呈式行われた東京会場では、東京芸術大、一橋大など９の大学から11人の応募があり、増上寺大殿で、希望図書を受け取った。国籍別では中国７人、韓国２人、アメリカ１人、タイ１人。

関西会場は、大阪大学が３人、佛教大学３人、関西大学２人など13大学から19人の応募があった。12月４日の贈呈式は大本山百万遍知恩寺で行われ、中国13人、韓国２人、ベトナム２人、マレーシア２人の受賞者には、福原隆善台下が直々に希望図書を贈呈され、御影堂で数珠繰りなども体験した。

名古屋会場では、中国６人、台湾２人、インドネシア１人、合計９人の留学生から応募があった。名古屋大３人など７校からの応募で、12月14日、建中寺本堂で、図書を受け取った。その後、建中寺の徳川家墓所を見学したほか、抹茶の接待を受けるなど日本文化の一端を体験した。

三ヵ所全体で、大学院生24人、学部生13人、研究生２人、各会場で昨年に引き続いて応募した、という声が多く聞かれた。

●

2016ブック・ギフト贈呈内容

○応募者数
東京…11名、関西…19名、名古屋…９名
○授与式参加者数
東京…11名、関西…19名、名古屋…９名
○応募者国
東京…中国７名、韓国２名、アメリカ１名、タイ１名
関西…中国13名、韓国２名、ベトナム２名、マレーシア２名
名古屋…中国６名、台湾２名、インドネシア１名
○応募者大学別一覧（応募者数順）
東京…東京芸術大学４名、青山学院大学１名、国立音楽大学１名、大正大学１名、東京電機大学１名、一橋大学１名、法政大学１名、立教大学１名
関西…大阪大学３名、佛教大学３名、関西大学２名、同志社大学２名、大阪大谷大学１名、大阪観光大学１名、京都府立医科大学１名、嵯峨芸術大学１名、滋賀大学１名、奈良女子大学１名、ノートルダム女子大学１名、阪南大学１名、桃山学院大学１名
名古屋…名古屋大学３名、愛知淑徳大学１名、東京福祉大学１名、豊橋創造大学１名、名古屋経済大学１名、星城大学１名、南山大学１名
○応募者在籍一覧
東京…大学院７名、大学４名
関西…大学院12名、大学５名、研究生２名
名古屋…大学院５名、大学４名

万里の路を行く

JOAO DANPING（中国・法政大学）

人は自分に与えられた環境のなか、自分のため、あるいは他の何かのために一生懸命生きようとする。そして、昨日よりいい自分を発見しようとしながら、どんどん上に向かって成長していく。

そこで、より自分に相応しい環境を求め、その人は旅に出る。私もその一人であるかもしれない。

私はより学べる環境を求めて、北朝鮮から中国に、また中国から日本に留学した。この過程を通して、異文化を触れながらその素晴らしさを体験することができた。

これこそ私にとって大きな夢の実現であったし、今は法政大学で博士を目指して、楽しく研究を行っている。

実は、来日したばかりの時から、異文化に対する理解や、学問に対する渇望があったわけではない。次第に知っていく過程で、いつの間にか違う「自分」に出会ったのだ。この話は、先月開かれた文化祭典で通訳者として働いていた経験から始まる。

この祭典は、2020年東京オリンピックを機に、たくさんの外国人に日本の伝統文化を知らせようとして実施されたイベントである。最初に、通訳者として選ばれた時、私は大きくは期待していなかった。なぜなら、伝統文化は「古い、ダサい」というイメージがあり、敬遠されてしまうと思ったからだ。

しかし、実際に参加して出展社の係員の説明を聞いて、私のイメージは見事に裏切られた。印鑑作りやだるまの顔描き、または伝統椅子の作り直しなど、匠の技と参加者の好奇心、その表情と様子は熱情そのものであり、古いとかダサいとかを遥かに越えていた。

会場は非常に賑やかで、出展社それぞれ、自分が従事している仕事への姿勢、熱情、誇りなど、素晴らしいと思うことを相手にもわかってほしいという気持ちを表すのに充分であった。その伝統文化に対する熱情、またそれを世界に発信しようとする姿勢は、本当に素晴らしいものがあった。

中国には「万里の路を行くのは万巻の書を読むに勝る」ということわざがある。本で学ぶ知識も多いが、それ以上に実際に行って体験することが重要だという意味だ。

異文化であれ、学問であれ、このような実際的な体験、議論を通してこそ、真の理解、または本当の知恵を得るのではないでしょうか。

これからも、私の「日本旅」は続いていく。

「当たり前」とはなにか

楊　ヌリ（韓国・立教大学）

私が日本に来て思うことは、「当たり前」とはなにかということです。

例えば、ふつうは遠いところより、近いところが行きやすいと思われます。しかし、物理的な距離の近さが、必ずしも人が行きやすい場所であるとは限りません。

私は韓国で生まれ育ちました。韓国で最も近い国といえば、北朝鮮です。そこは、地が繋がっていても行けない場所です。いつになったら人々が自由に行ったり来たりできるのか、誰もわかりません。「近い場所」とは、行きやすさを判断する上で絶対的な基準にはなりえません。この社会では、近いから行けるというのは、当たり前なことではないのです。

日本の中でも、韓国と北朝鮮のように近くても行けない場所を目にします。それは、原発事故の後、家に帰れない人々のことです。本来ならば、心も体も一番近い場所であったはずのところが、目の前に見えても、歩いて行ける場所であっても、今は行けないところになってしまいました。いつ戻れるのかは誰ひとりわかりません。

大本山増上寺でのブック・ギフトin Tokyoの授与式

単純に考えてみれば、100歩すすむより一歩進むことが簡単に見えます。それが当たり前かもしれません。しかし、この社会の中では、100歩よりも難しい一歩があると思います。その一歩の難しさの原因の真ん中には「人間」という生き物が存在します。戦争や原発を巡る人間の思いがその一歩をどれだけ難しくしているのかと考えます。いや、100歩より一歩が易しいというのはただの思い込みかもしれません。世の中に「当たり前」は存在しないのですから。人間の思いによっては、100歩難しい一歩も、一歩より易しい100歩もどちらとも存在しうるのではないでしょうか。

互いを愛する社会に

遅　力榕（中国・同志社大学）

私の理想はすべての人々が自分らしく暮らせる持続可能な社会を創造することである。お互いを愛する社会をつくることともいえるだろう。

中国は儒教、仏教などの影響で、慈善、お互いを助けるという文化はとても深かった。しかし、残念なことに現在、他人のことに対して無視、無関心な態度を取る人が少なくない。ニュースでよく出ているかもしれませんが、中国では道で倒れているおばあさんを見ても、見ていないふりで通り過ぎる人は多数である。なぜなら、そのおばあさんが本当に困っているのか、それとも自分をゆすりたいのかという疑いがあるからである。実際、中国にはこのようなことはいっぱいある。このまま続くと人間関係が崩れると同時に、社会が崩れる恐れがある。

私はこの無縁社会、無関心社会を変える目標を達成するため、知見の蓄積を求め、日本に来た。そして、もっとも関心がある社会福祉学分野の大学院に進学した。社会福祉学が強調し、学問の基盤としての社会正義を世界に広げる必要性があると痛感した。すなわち、社会福祉学は、社会学や経済学と異なり、明確な価値のもとにつくられた学問だと理解する。私は社会福祉学の価値に共感するとともに、この道で研究を進めていきたいと思う。

日本に来てから、私を温かく見守っていただいた方々には感謝の気持ちでいっぱいである。日本語の勉強から、論文の書き方、学会発表の仕方など学習に関することのみならず、生活面、健康面、経済面のことで戸惑ったり、困ったりしたときに、その戸惑い

大本山知恩寺でのブック・ギフトin Kansaiの授与式。

を解いてくださり、背中を押してくださり、ご指導、ご鞭撻くださった方々に心から感謝の意を述べたい。私は将来、社会福祉学の理論と価値を中国に広く普及しつつ、日本と中国の間の架け橋になれば幸いだと考えている。

違いと共通点を体験して

周　菁（中国・関西大学）

今年の４月に大阪に留学に来ました。学生部の時の専攻は日本語だったので、日本に対して一定の理解も持っていたためか、慣れないことが少なくて、ホームシックもほとんど感じませんでした。それどころか、母国とはそんなに変わらないなぁって親しみさえ感じました。

海外留学へ行ったら、カルチャー・ギャップなど母国との異なるところに衝撃を受けて、その「違い」を大いに感じる人が多いでしょう。しかし、少しは変わっているところがあったとしても、わたしは「あ、同じだ！」と気づいたとき、その「共通」のところに感心したり、感動したりすることが多くありました。

例えば、日本の主食は基本的に白いご飯で、中国南方の食習慣と同様です。美味しい食事を取ることはわたしにとって、元気をつける一番有効な方法です。日本のご飯は特にうまいと、おかずも中国のと似ているので、毎日おいしい料理が食べられて、すごく幸せです。また、春夏秋冬の四季、梅雨、台風という天気の変化は日本も中国もあるので、体の感覚もそんなに変わりません。

たくさんの共通点の中で、わたしが一番親しみを感じて、素晴らしいと思っていることは、両国は同じく漢字を使うということです。日本に来て、町の四方八方に漢字があふれています。中国語の漢字と意味が異なるものもありますが、ほとんどが一緒で、わかりやすいです。漢字の故郷は中国ですが、アジアで一番早く近代への道を歩んできた日本は、西洋の新しい概念や技術を学ぶために、明治期に漢字を利用して、大量の「和製漢語」を作りました。その多くを中国や韓国にも伝えて、東アジアの近代化に大きな貢献を果たしました。漢字という知恵の結晶が古くから現在でも日本と中国の人々に使われて、守られて、すごく誇りに思っています。

日本に来て、毎日風習や文化などの違いと共通点を体験していて、小さな驚きや喜びがいつも思わないときにやってきます。その一瞬一瞬をしっかり胸に刻み込んで、人生の宝物にします。

自分の変化

謝　敏怡（台湾・名古屋大学）

私は、台湾から日本に来てすでに２年半が経ちました。台湾は、日本と同じく島国で、お米を主食としているので、気候や食生活は大きな違いがありません。とはいえ、最初に日本に来たときに、当時、自分が気づいていないけど、あら程度のカルチャーショックを受けたと思います。周辺環境に対してイライラして、自分は一体何しに留学してきたのかと、毎日自分に問い続けていました。でも、家族、友だち、研究室の先輩や先生の温かいご支援で、少しずつ慣れてきました。また、自分の心構えが変わったことも大きかったでしょう。日本に来て思うことは幾つかありますが、「自分の変化」についての考えを取り上げたいと思います。

「自分の変化」については、違う文化や価値観を受け止めかたが変わったと思います。自分と異なる考え方や価値観に出会った際には、どうやって対処するのか。「これは文化だからしょうがない」「こんな考え方があるなんて信じられない」などはよく出て来る反応だけど、どちらもふさわしくないと思います。なぜなら、相手の文化や考え方を「理解」していないからです。理解しなければ尊重することもできないのです。したがって、多様な文化や価値観について、理解することは第一歩です。そして、理解した上でコミュニケーションをして受け止めることです。

自分と異なる考え方や価値観について、「理解、コミュニケーション、尊重（受け止め）」というやり方を持っていれば、現在多様な社会や文化についての対処の仕方でもなり、平和につながることもできるのではないかと思います。これは、私が日本での留学生活で得られた一つの重要な経験です。

二人の先生との出会い

王　冠亮（中国・南山大学）

日本に留学に来て、間もなく２年間になる。研究の道は孤独で時にも辛いが、よくいったい何のためにこの道を歩んだのと自問している。最初は答えがなかなか見つからなく、迷っていたが、二人の日本人の先生の言葉で、ようやくその意義を悟った。その契機は先生たちに教えていただいた二つの文である。

「亮、研究を頑張って、積極的に社会に貢献しよう。」指導教員のこの言葉は常に耳で響いている。ただ「日本に行きたい、もっと勉強したい」という素朴な考えを持ってきた私はこの言葉を聞いたら、ショックを受けた。それまで留学の意義を深く考えたこともなく、期待されたこともない私は、昔と同じ任務を完成するように勉強していた。先生の言葉を真剣に考えてみたら、まさにその通りだと分かった。社会に貢献できることこそ、人間の価値ではないだろうか。もしそのような気がなければ、いくら知識を身につけても、どんなに高い学位を持っても、やはり自己満足に留まり、意味も分からない。これからはぜひ社会に貢献するように努力していこうと思う。

私の主領域は日本語教育である。ある日の授業で、「言語教育、外国語教育の意義」というテーマについて論議した。その授業を担当していた堤という先生に次の文を教えていただいた。「言語教育は平和の維持力、戦争の抑止力だ。」。なんと素晴らしいご指導だろう。言語教育を通じ、各国の国民の間に相互理解を深め、戦争が抑止でき、誠に大事な力である。日本語教育を先行している私にも、いつか日本語教師として、平和を守れて本当に良かったと考えている。これも平凡の私の使命かな。これを自分の使命としたい。できるならば、将来自分の学生にも伝えたい。

建中寺でのブック・ギフトin Nagoyaの授与式。

留学生活は単調に見える。普段は家、学校など限られるところにしか行かない。しかし、日本留学のおかげで、素晴らしい日本人先生との出会いで、新しい自分にも出会った。ただ勉強の場所を変えるわけではなく、これこそ、留学の意義だと信じている。

ブック・ギフトで私費留学生に贈呈した書籍一覧

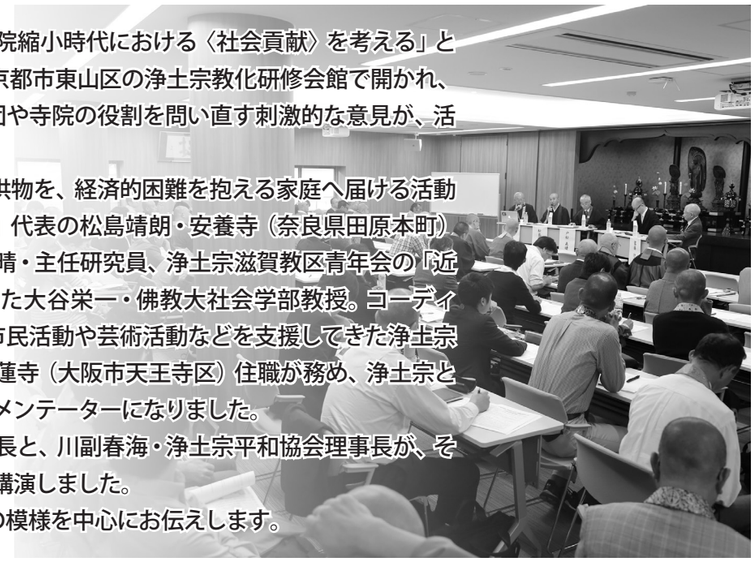
《東京》
朝鮮植民地支配と言語（2010）、3分でわかるロジカル・シンキングの基本、一生に使える見やすい資料のデザイン入門、ビジネススキル大全、財形会計（第13版）、日本の伝統芸能講座　舞踊・演劇、横道萬里雄の能楽講義ノート謡編、雅楽　能笛譜、コンピューターの構成と設計　上　第5班、コンピューターの構成と設計　下　第5班、データ構造とアルゴリズム　新・情報/通信システム工学、コンピュータアーキテクチャ　電子情報通信レクチャーシリーズ、作曲家別名曲解説ライブラリー　ブラームス、作曲家別名曲解説ライブラリー　ベートーベン、形式から理解するクラシック、サウンドシンセンス　電子音響学入門、音とコンピュータ　そのプログラシング サウンドデザインそしてメディアート、C言語ではじめる音のプログラシング　サウンドエフェクトの信号処理、サウンドプログラミング入門　音響合成の基本とC言語による実装、新共同訳　ハーフボリュームバイブル　NI63HVクロス装、新共同訳　大型新約聖書　詩編つきNI360（R）、元暁佛学思想研究、仏教瞑想論、「新編日本古典文学全集」58（謡曲集①）、「新編日本古典文学全集」58（謡曲集②）、「大成版観世流初心謡本（中）」、サイトカイン・増殖因子キーワード、実験で使うとこだけ生物統計1　キホンのキ、実験で使うとこだけ生物統計2　キノンのキ、精神と音楽の交響、カラー図解音楽事典、マルテの手記、、音大生・音楽家のための英語でステップ

《関西》
新編日本古典文学全集1. 古事記、新編日本古典文学全集5. 風土記、新編日本古典文学全集2. 日本書記（1）、新編日本古典文学全集3. 日本書紀（2）、ユダヤ人、世界と貨幣、教養講座　琉球・沖縄史、大分岐―中国、ヨーロッパ、そして近代世界経済の形成、ビジネスモデルの教科書[上級編]、言語学第2版、日本語文型辞典　英語版、イギリス文学入門、アメリカ文学入門、世界を読む国際政治経済学入門、リーダーのための経営心理学　人を動かし導く50の心の性質、CLIL英語で学ぶ国際問題、ケースで学ぶ犯罪心理学、近代日中語彙交流史―新漢語の生成と受容、文法講義―朱徳熙教授の中国語文法要説、日本語の形容詞、言海、病いの語り―慢性の病いをめぐる臨床人類学、ケアをすることの意味　病む人とともに在ることの心理学と医療人類学、パーソンズ　医療社会学の構想、世界の出産、ハリー・ポッタ魔法生物大図鑑、ハリー・ポッタ公式ガイドブック映像の魔術、デザインが楽しい！地図の本、、オンネリとアンネリのおうち、ニッポンを解剖する！京都図鑑、大学1．2年生のためのすぐわかるフランス語、詳説日本史研究、名所・旧跡の解剖図鑑、現代アジアにおける華僑・華人ネットワークの新展開、気候文明史、戦場のコックたち、世界5大宗教全史、現代中国社会保障事典、中国農村育地域における高齢者福祉サービス　小規模多機能ケアの構築に向けて、TOEICテスト公式問題集　新形式問題対応編、質的データ分析法―原理・方法・実践、英国福祉ボランタリズムの起源―資本・コミュニティ国家、福祉哲学の継承と再生、神曲【完全版】、神曲【講義】、「翻訳とはなにか」、「有頂天家族　二代目の帰朝」、「あの日」、日本近代史を学ぶための文語文入門：漢文訓読体の地平、日本全国神話伝説の旅、絵巻で見る　読む徒然草、計量経済学大全、整形外科リハビリテーション、高次脳機能障害のリハビリテーション、終末期の摂食嚥下リハビリテーション、老生、コンビニ人間、魯迅の仙台時代　魯迅の日本留学の研究、細雪、カラーコーディネーションの実際　カラーコーディネーター検定試験１級　公式テキスト第３分野環境色彩、数と建築：古代建築技術を支えた数の世界、ウイトルーウイウス建築書[普及版]、世界宗教建築辞典

《名古屋》
新聞を読むためのインドネシア語時事用語辞典、インドネシア語辞典、安曇野・白馬山麓、現代モンゴル語口語辞典、日本語・モンゴル語基礎語辞典、街道をゆく5　モンゴル紀行、The case of the Speluncean Explorers 、The Decisve moment 、ガリバー旅行記、中国語日本紹介辞典、中国語で案内する日本、「日本の衣食住」まるごと事典、日本語源大辞典、農業の社会学　アメリカにおける形成と展開、西村和雄の有機農業原論、食の社会学、隼の野菜の栄養事典　最新版、山川詳説日本史図録、紫式部日記、「孫子の兵法」のことが漫画で３時間でマスターできる本、心が大きく育ったいせつな日本の歴史120の名場面、認知的アプローチから見た第二言語習得　日本語の文法習得と教室指導の効果、現代日本語指示詞の総合的研究、コーパス入門（講座日本語コーパス）、「接続詞」の技術、最新英語学・言語学用語辞典、新訂　字統、知りたがりの、お菓子レシピ　小さなつつも、大きなポイント、樋口愉美子のステッチ12か月、完全比較　国際会計基準と日本基準（第3版）、これからのマネジャーの教科書、リーダーのための経営心理学　一人を動かし導く50の心の性質

10.17 浄土宗教化研修会館でシンポジウムを開催

寺院のソーシャル・キャピタルとは何か



浄土宗平和協会が主催する「寺院縮小時代における〈社会貢献〉を考える」と題するシンポジウムが10月17日、京都市東山区の浄土宗教化研修会館で開かれ、約100人が参加しました。伝統教団や寺院の役割を問い直す刺激的な意見が、活発にやり取りされました。

登壇したのは、寺に寄せられた供物を、経済的困難を抱える家庭へ届ける活動を展開する「おてらおやつクラブ」代表の松島靖朗・安養寺（奈良県田原本町）住職、浄土宗総合研究所の戸松義晴・主任研究員、浄土宗滋賀教区青年会の「近江米一升運動」などを調査してきた大谷栄一・佛教大社会学部教授。コーディネーターは、「應典院」を拠点に市民活動や芸術活動などを支援してきた浄土宗平和協会副理事長の秋田光彦・大蓮寺（大阪市天王寺区）住職が務め、浄土宗ともいき財団の佐藤行雄理事長がコメンテーターになりました。

シンポジウムに先立ち佐藤理事長と、川副春海・浄土宗平和協会理事長が、それぞれの活動を報告。大谷教授が講演しました。

ここでは、講演とシンポジウムの模様を中心にお伝えします。

佛教大学・大谷栄一教授講演要旨

ソーシャル・キャピタルとしての宗教 ～近現代の浄土宗の場合～

戦前・戦後期における浄土宗の社会事業

日本の仏教寺院は近世から近代を経て現代にいたるまで、程度の差はあっても一定の公共性（公共的役割）を保持し、発揮してきたということができる。

浄土宗では「戦前の一時期、「社会事業宗」とみなされるほど斯業に活況を呈し、世間の注目を集めたものだった」と長谷川匡俊氏は指摘する。

そもそも、戦前の仏教社会事業の成立に浄土宗関係者が深く関与していた。渡辺海旭、椎尾弁匡、矢吹慶輝、長谷川良信、秦隆真などの「浄土宗社会派」の流れがある。大正期には、宗教大学社会事業研究室の開設、財団浄土宗報恩明照会の設立、増上寺社会部、知恩院社会課の設置などがあり、浄土宗の社会事業はこの時期に本格的にスタートする。

戦前は社会福祉制度が未発達のため、国家の福祉政策の補完的役割を果たした。戦後は福祉国家体制の整備により、相対的に役割を低下させてきた。とくに世俗主義の徹底（政教分離の原則）により、宗教と福祉は制度的に分離され、浄土宗の社会福祉施設は社会福祉法人の傘下になった。

戦後の「措置の時代」（国家の管理・庇護のもとで各施設等へ国からの補助金を分配する運営）では政教分離が徹底されたのだ。

現代における浄土宗の社会貢献とは？

2000年の社会福祉基礎構造改革（社会福祉の分権化・民営化）による福祉国家体制の後退を受け、「宗教の社会貢献」がクローズアップされ、その公共的役割に注目が集まっている。では、仏教社会福祉事業と世俗的な社会福祉事業はどう違うのか？　仏教者や仏教団体の社会福祉事業は宗教活動なのか、教化活動なのか？　という「仏教と福祉」をめぐる問いが生じてくる。

浄土宗社会事業の独自性を主張した藤井實應・浄土門主（総本山知恩院85世門跡）の発言に注目してほしい。

「宗門の社会事業は他の一般社会事業と何等か異なる特色が無くてはならぬ。それは宗門と名のつく以上、形の上ではともかく、其精神、若くは目標は「念仏すること」が中心でなければならぬ」。（「宗門社会事業と教化」『浄土宗社会事業年報』第壱号、浄土宗宗務所社会課、1934年、78頁）

念仏の精神によって社会事業をすることで、「生きた社会事業」となる。「かくしてこそ宗門の社会事業はそのまゝ教化事業であり、念仏の聖業となるのである」（79頁）。社会事業＝教化事業という視点。つまり、宗教活動＝教化事業＝社会事業という意味づけがあるのだ。

地域社会をつくる寺院 ――地域ガバナンスと協働

人口減少、過疎化、無縁社会化という社会変動の中、寺院は、地域福祉の担い手（アクター）となれるか？

1990年代半ば以降、行政、民間企業、市民団体の間でのガバナンス（governance、共治、協治）が注目を浴び、「地域ガバナンス」の問題が浮上する。とりわけ、2000年代半ば以降、政府による「新しい公共」の提言によって、行政と市民の「協働（partnership）」によるガバナンスの実現が強調されている。

「新しい公共」とは、国家・自治体が国民の最低限の生活を保障するナショナルミニマムを切り詰め、それらを民間に委ねながら、地域再編を図ろうとする政策理念。その一方、協働の背景には、阪神・淡路大震災をきっかけとするボランティア活動の盛り上がりと特定非営利活動促進法（NPO法）の成立（1998年）を契機とする市民団体の伸長といった事情もある。宗教者を含めた市民がより積極的にコミュニティ政策に関与する機会と捉えることもできる。寺院が公共的役割を発揮する機会なのだ。

その時、寺院は「葬式仏教」の役割を通じて醸成してきた「結合型」のソーシャル・キャピタルを保持しつつ、檀信徒以外に開かれた「橋渡し型」のソーシャル・キャピタルを醸成できるだろうか？

僧侶や寺族は、地域社会で社会事業や社会福祉による公共的役割を果たしてきた信頼がある。さらには近江米一升運動のように、一地域を超えたトランスローカルな活動も見られる。「葬式仏教」という役割、社会活動・地域活動という役割をうまく結びつけ、地域的あるいは地域横断的な公共的役割を、今後、浄土宗寺院は発揮することができるかどうかが問われているのではないか。

佛教大学・大谷栄一教授

シンポジウム抄録

寺院縮小時代における〈社会貢献〉を考える

宗教の社会貢献をどう捉えるか

秋田●僧侶の社会貢献には、よく二つの批判が向けられてきました。社会貢献は「葬式仏教」に対する免罪符だという声と、もう一つは、内部から寄せられるのですが、社会貢献よりも檀信徒教化を優先すべき、つまり「社会貢献」と「教化」を二項対立で捉えるというものです。

社会貢献という言葉は、時代や状況により、捉え方が推移しています。宗教の社会貢献という文脈でいえば、戦前と戦後、さらに3. 11以降は意味合いが違ってくる。松島さんは1975年生まれで、私は55年生まれ。私が考えるのと、松島さんが考える社会貢献には温度差もあると思います。

松島●おてらおやつクラブは、社会貢献をしようと思って始めた活動ではありません。きっかけは3年半ほど前に大阪で起こった母子餓死事件です。大変な衝撃を受けました。その前から、お檀家さんからのお供えがたくさんありすぎて、無駄にしてしまうという課題があって、この二つをつなげることで始まった活動です。ですので、始めたときは社会貢献をしようという気持ちはありませんでした。

秋田●最近も朝日新聞で取り上げられていましたよね。外部から評価を受けることで変化はありますか。

松島●社会的には今、お寺や、僧侶へのイメージはあまりよくないですよね。そんな中で、青年僧ががんばっている姿は、檀家さんだけでなく、地域の皆さんも「お坊さんもええことすんねんなあ」といってくださる。若い僧侶が自坊の法務、青年会の活動以外に、社会と接点を持ちなが

ら活動するのは、これまで関係がなかった方々から評価を頂けることになります。それは大きな励みになるし、発心につながることもあるのではないでしょうか。

秋田●宗教の社会貢献ということで見れば、今まで違う流れがあるように思うのですが、どうですか。

戸松●ヨーロッパ諸国の植民地政策では、社会貢献とキリスト教がセットになっていました。それは、社会貢献というよりも国家の利益のために行われてきた側面があると思います。宗教は、教育や医療、その国の人々が直面している苦難の現場で福祉を提供し、交換条件としてキリスト教徒になることを要求した。つまり社会貢献を布教の手段としてきたのです。今では、1960年代の第二バチカン公会議での反省があって、変わってきています。

どの教団も維持、発展のために社会貢献をした歴史がある。ただ、「おてらおやつクラブ」や「ひとさじの会」を見ていると、上からのトップダウンでなく、自発的に活動が起こっていて、少し局面が変わってきたかなあと感じています。

秋田●「措置」から「契約」というのは、時代のキーワードだと思うんです。オカミ丸抱えでなく、一人一人が主体性をもって完結しようという流れがある。浄土宗にも各種団体がありますが、今おっしゃったこととどう関連するのでしょうか。僕はどちらかといえば、各種団体のあり方は「措置」に近い印象があります。組織に組み込まれることで安心感はありますが、自分がインディペンデントな存在として、一人一人の市民とつながっていくという「契約」に伴う緊張感がやや乏しいと思います。

戸松●社会福祉をしているそれぞれのお寺では、契約関係のリアリティはあると思います。ですが、各種団体となると、なかなかリアリティがない。これからは、ネットワークを作り、問題を共有していかなければならないと思います。

秋田●仏教の社会参加、Engaged Buddhismについて聞きたいのですけど。戸松さんは本場のアメリカで研究なさっていましたね。

戸松●ちょうど私がアメリカで留学していた89年から91年は、関連の本が出始めた頃でした。ティク・ナット・ハンにも会ったのですが、彼の書物を読むと、すごくわかりやすい。

悟りを開くためには、ありのままの姿を見なくてはならない。そのときに、社会で起きている問題と自分とを考え合わせるならば、関わらざるを得なくなる。その思いによる行動が、コンパッション（慈悲）であり、それは理念ではないという考えに惹かれました。

そうせざるを得ないという思いから行動が出てくるという原点がある。困っている人を助けようとモノを出すのではなく、なぜ起きるのか深く見るのが仏教の知恵であり、政治活動ではなく生き方で関わろうとする考え方に惹かれたのです。

タイでは、開発に関わる僧侶が70年代から出てきて、農村に入って生産性の向上などに取り組み、賛同する村人もいた。けれど、生産性が上がったからといって、僧侶が目指す村にはならなかった。その時に、出てきたのがＮＧＯの活動と何が違うのかという問いでした。つまり、瞑想、念仏、禅といったもの、そこからスタートしなければ意味がないし、仏教者としての実践の中から続けていく力を得るんだということでした。

秋田●松島さんはどう思いますか。

松島●これまでの諸先輩方の活動について、勉強不足で実はほとんど存じ上げておりません。そもそもおやつクラブは、個人的な問題を解決したいというところから始まり、そこから同じ悩みを持つ仲間が集まってきた。インターネットを使って多くの方とつながり、結果的に大きな活動になったんです。

活動を始めるにあたって、スローガンでなくて、簡単に説明するためにキャッチコピーをつくりました。「『おそなえ』を『おさがり』として、『おすそわけ』する活動。それがおやつクラブです」というものです。これをインターネットでどんどん広げていくことをしました。インターネットが強力な武器になりました。

寺院のソーシャル・キャピタルとは

秋田●『おすそわけ』というのは、ソーシャル・キャピタルにつながると思うんです。應典院ができたころ、ＮＰＯの方に「お寺はいいですね、歴史があり、信用があるから」とよくいわれた。二十歳くらいの若者でも、歴史と信用があると思っている。お寺についてまわるのは、伝統あって、歴史があって、信頼があって、規範があるということ。ある人から、それがソーシャル・キャピタルだと教えられて、すごく新鮮だったのですけど、内部の人間は、あまりにも当たり前のものだと思っていて、そのことの価値にちゃんと気づけていないのではないでしょうか。見えないということは、どのお寺にもあるということです。つまり、それをどう掘り起こし、デザインするのか、が問題になっていると思います。お寺のソーシャル・キャピタルを形にしたのが、「おすそわけ」だと思うんですが。

松島●現在450ヵ寺から賛同をいただいていますが、この活動が全国に広まり始めて、ようやくお寺にある目に見えない資源（信仰の力）を活用した活動なんだだな、と実感しました。また、貧困問題は長期戦で、地に足を付けた長い支援が求められていますから、お寺の歴史も資源だったのかなあと思います。

秋田●ところでタイトルには、寺院縮小と掲げましたが、キャピタルとしての檀家、地域との関係が衰退しているといえますが。

戸松●どんな優秀な僧侶がいても、人がいなくなれば、寺を維持するのは難しくなってくる。行政が行う福祉・医療の「選択と集中」に、これから寺院も影響を受けることになると思います。

秋田●これまで、檀信徒との関わりがメインでしたが、それが減っていく中で、どう縁をつくっていくか。地域にある様々なセクター、公共機関、ＮＰＯ、企業と、これからどう関わっていくべきか。おやつクラブもお寺だけでなく、様々なセクターとつながりがありますね。

松島●おてらおやつクラブは、複数の団体を通じておすそ分けをしています。社会福祉協議会、行政の福祉窓口などを通しています。

秋田●行政などでは宗教セクターは、どう位置付けられているのでしょうか。

戸松●ダブルスタンダードがあると思います。たとえば東日本大震災で、行政のトップは熱心な仏教徒でも、慰霊法要は献花だけだったりする。遺族のほとんどは地元の寺院の檀家さんと分かっていても、それ以上のことはできない。「政教分離」ということにセンシティブになりすぎている。そこには、政治と宗教が一体になった戦前への反動があると思います。

秋田●私のところは、宗教法人の應典院と、ＮＰＯの寺町倶楽部という二つの下駄を履いています。話をするときは、ＮＰＯの役員として話す、直接住職ではなく、ＮＰＯという間接話法で話す。これが市民的公共を担保する一つの方法ということだと思うんですが。

戸松●ともいき財団も同じですよね。公益財団法人にすると面倒な手続きがある。だが、宗教団体があえて公益法人を持つことで、公に行政との連携ができるというのは、現状ではたいへん意味があると思います。

佐藤●おっしゃる通りです。公益財団法人になるというのは、浄土宗でありながら、国民全体と関係をつなぐことになると思います。

秋田●大谷先生、ここまでの議論を聞いてみてどうですか。

大谷●宗教の社会貢献が問題になっていますが、今は大学も研究者も社会貢献をしなさいとよく言われます。成果を急ぎすぎていると思える時もあるが、ただそこには、これまで社会に対して貢献してこなかったじゃないかという批判があると思います。それには、答えていくべきだと思います。

宗教に話を戻せば公共性や公益性が今後問題になってくると思います。江戸時代は檀家制度として、戦前も家制度との関係で公の役割を果たしてきた。戦後、その役割は薄くなったけど、今新たに求められていると思います。

秋田●多くの宗派が、寺院活性化マニュアルを作っていますが、その多くで社会貢献を勧めています。今は選ぶ時代です。事業者のセンスが問われるようになっています。そこに宗教の社会貢献というポテンシャルが生かせるというのが、私の持論なんですが。

戸松●文化庁が平成20年に実施した宗教法人の事業収入等の調査によると、全寺院の60％近くが500万円に満たない事業収入です。さらに、檀家が減り、宗教活動収入も減少する中で、社会貢献を考えていく必要があると私は思うし、この現実を見なくてはならないと思います。

秋田●おてらおやつクラブの経営は、どうですか。

松島●最初は私の持ち出しでしたが、去年から会計をしっかりするようになりました。去年1年間で、約300万円の収入があり、内訳は助成金が200万円、個人の寄付などが100万円という感じです。

秋田●ちなみに助成金で一番たくさんいただいているところは。

松島●浄土宗といいたいところですが、日蓮宗の「あんのん基金」から100万円いただいています。この「あんのん基金」のすごいところは、申請を審査する人々の中に、宗内の役職者のほかに、一般の檀信徒も数名入っているということです。

秋田●日本では社会貢献をする場合、お金集めという世俗的な事柄も自分たちでしなくてはならない。でも、海外は違うようですね。

戸松●日本は宗教法人法で聖俗分離が基本と定められて

いますが、海外は聖俗分離が徹底しています。海外では宗教団体はすべて非営利法人扱いです。世俗の事を扱う法人の理事長は、宗教者ではありません。金銭面には、宗教者に権限が少なく、あくまで儀礼など聖の部分の象徴です。そのため、金銭的なことは、日本でいう檀信徒にあたる人々の中で公認会計士や、弁護士など社会的信頼がある人がしています。

松島●おやつクラブでは、今年は会計規模が500万円ほどになりますので、そろそろ自立していく段階になってくると思っています。助成金に頼る段階から、個人の寄付を多数募るモデルに変えていくべきだと思っています。将来的には、認定NPO法人になることも視野に入れて、兼業せざるを得ない若い和尚さんを雇用することができればと思います。

秋田●お寺と経済のかかわり方を語るときに、社会貢献は、聖なる宗教活動とは違うけど、脱世俗的であり、お坊さん便などとは違うお寺と経済の在り方を語るための素材になると思います。

寺院の公共的役割とは何か

秋田●東日本大震災で、たくさんの僧侶が現地に行きましたが、あれは宗教活動でしょうか、それとも社会貢献でしょうか。多くのメディアが弔いを社会貢献として持ち上げましたが、葬儀は社会貢献ではないのでしょうか。

戸松●亡くなった方の慰霊は私たちの本分であり、一番の公益だと思います。

松島●葬儀に僧侶が呼ばれないというケースが増えてきているといいますが、僧侶の威儀作法、法話は人々に安らぎを与えるという意味で、社会貢献であるし、宗教者として一番しなければならないことではないでしょうか。

秋田●僧侶の本分だと言い切りましたが、檀信徒もそう思っていると思いますか。

戸松●一部では信頼を損なうなどして批判を招くようなことがあるのも事実です。社会的な信頼を得られる住職を育てなければ、お布施の問題はなくならない。分かりやすい定価制の方に流れていくことになるでしょう。

2025年問題がよく取り上げられますが、死期が近づいた人を受け入れる場所が少なくなり限られてくることも考えられる。その時に、悩んだり、困っている人々に、私たちは何かできないでしょうか。

秋田●コミュニティにどっぷり関わっていくようなお寺の在り方の延長線上に、葬式仏教を位置づけし直すことができるはずです。葬儀は福祉の領域になると思います。単身で生きる人にとって、どう弔われ、葬られるかは、安心材料になる。これを進めれば、脱世俗性、宗教性がにじみ出てくるのですが。

大谷●社会貢献で、語られてこなかった部分があると思います。生きている人ばかりが問題となり、死者が入ってこない。死者との関わりは、お寺ならではの社会貢献だと思います。

松島●お葬式が福祉の領域に入ってきたということですが、連続性ということですよね。お寺も選ばれる時代といわれる中で、「死」の手前から関わっていくことが重要だろうと思います。

秋田●全体を聞いて、佐藤理事長は。

佐藤●宗教の社会貢献という捉え方がされますが、それは宗教者の自意識過剰ではないでしょうか。僧侶も社会的な存在であり、変化に応じて需要に答えるのは当たり前だと思います。

一番印象的だったのが、松島さんが社会貢献を目指して始めたのではなく、母子家庭の貧困を何とかしなくてはならないという思いから始めたこと。私から見れば極めて宗教的だと思います。「そうせざるをえない」という気持ちが、僧侶には強くなくてはならないと思うのです。「寺がそんな状況でないからできない」というのも正しいのでしょうが、何かできることがあれば、していくというのが自然だと思います。

今日の議論の中で、お寺のソーシャル・キャピタルとは何かといえば、信用ということでしょう。その期待に背けば、批判を受けることになる。松島さんの活動は、社会の期待にピタッと合っていることであり、それが浄土宗から出てきたことは心強いことだと思います。

もう一つ、今日の議論の中で「信仰」という言葉が出てこなかったことが気になりました。一番大事なことは信仰だと思います。社会の人は、僧侶は当然信仰を持っているものだと思う。だから期待もしている。自分の信仰に従って、社会の事象に立ち向かうことから始めることが重要だと思います。

浄平協 TOPICS

第9回浄土宗平和賞受賞対象者公募中

本ダーナと同封の募集要項の通り、第9回浄土宗平和賞の受賞対象者を公募している。この賞は、浄土宗の教義を広め、儀式を行うという寺院の活動にとどまらず、「社会参加する仏教」を志向し、平和活動、国際交流活動、環境保護活動、地域福祉活動など、幅広い分野で公益のための活動を行っている浄土宗寺院・教師または浄土宗教師が代表（中心的な役員）を務める団体を顕彰し、支援するもので、締め切りは来年1月末日。

自薦他薦を問わず、多くの推薦をお願いしたい。

スタディツアー開催迫る

第9回のスタディツアーは、平成29年1月30日から2月3日までの日程で実施する。行き先はパラオ。天皇皇后両陛下が平成27年4月、パラオに慰霊の旅をされた。浄土宗平和協会も、戦争犠牲者の極楽往生を祈念し企画したもの。次号のダーナにて詳細を報告する。

滋賀支部で今年も平和誓願法要が

浄平協滋賀支部は、平成29年3月11日に滋賀県草津市正定寺で、平和誓願法要を行う。

東日本大震災の7回忌となる震災当日に、物故者の追悼法要を行うと共に、アメリカ同時多発テロ物故者の17回忌、阪神淡路大震災物故者の23回忌など、震災、テロの犠牲者の追悼も行う。

熊本地震緊急募金に489件総額11,268,543円

熊本地震緊急募金については、前号にて募金状況、支援先などの報告を行いました。緊急支援については、計7団体に総額330万円を寄付し、それぞれの団体から活動報告を受けました。

今号では第2報として、その後の募金状況、活動支援の状況について報告します。

■募金者（平成28年9月26日～12月26日　※敬称略）

・福島教区中央組　　無能寺
・茨城教区水戸組　　西方寺
・東京教区城西組　　善光寺
・兵庫教区神戸組　　浄福寺
・愛媛教区南宇和組　弘誓寺

なお、前号にて報告した名簿に誤りがありましたので、訂正させていただくと共にお詫び申し上げます。

・滋賀教区甲賀組　西照院（西照寺と掲載）

■活動支援状況

活動支援としては、全国コミュニティ財団協会と協働し、熊本地震の支援として全国各地からの寄付等による資金支援を中心とした現地で活動を行う市民（民間）による地域のコミュニティや暮らしを再生するための取り組みへの支援を行っています。

第1期は平成29年8月8日から10月末日まで募集をし、助成対象を熊本県内に所在地を有し、熊本地震の被災地域で活動を行っているNPO・市民活動団体ないしは、熊本県内に在住在勤在学するメンバーを中心とした地域の公益活動に取り組む組織に限定して行いました。

第1期の助成申請は以下のとおりです。

No	プロジェクト名	申請組織名	申請額	助成額	審査点
1	西原村災害ボランティアセンターコーディネーション機能の維持のための人員派遣	被災地NGO協働センター	400,000	400,000	80
2	空を見上げよう風と遊ぼう熊本に笑顔をプロジェクト	くまモンのピックカイト飛ばし隊	500,000	500,000	48
3	子育て情報誌「ことあそ」発行プロジェクト	ことあそ編集部	500,000	500,000	62
4	トリプルボランティアによる阿蘇地域の産業振興	NPO法人九州バイオマスフォーラム	500,000	500,000	71
5	地域にある間伐材や竹やススキを原料にした家庭用暖房給湯・地域熱供給パイロットプロジェクト	NPO法人田舎のヒロインズ	500,000	0	38
6	西原村・古閑地区における玄界島視察研修ツアー	被災地NGO協働センター	150,000	150,000	79
7	DIY復興ドームプロジェクト	復興支援ボランティア白樺隊	500,000	500,000	52
8	ジビエ料理でピンチをチャンスに～被災後の農地を荒らす害獣を「新たな資源」と捉えた創造的復興イベント～	NPO法人田舎のヒロインズ（世界農業遺産ASOプロジェクトチーム）	300,000	300,000	61
9	熊本地震被災地支援プロジェクト	NCK	300,000	300,000	74
10	南阿蘇村立野地区における災害復興活動及び被災された方への支援活動	災害復興ボランティア南阿蘇よみがえり	500,000	500,000	78
第１期申請額総額			4,150,000	3,650,000	
第１期申請額総額			4,150,000	3,650,000	

なお、第2期を平成28年12月1日から平成29年1月末日で募集をしています。報告は次号にて。

平和、共生、みんなのために

浄土宗平和協会（ＪＰＡ）

会員募集

国や信条を超え、「平和」という人類共通の理念のために、志を同じくする人々による連携をめざす継続的なネットワーク運動として、浄土宗平和協会は会員を募集しています。入会希望、問い合わせは下記事務局へ。

ブックギフト in Tokyoで本を受領した留学生

［入会要項］　浄土宗平和協会（ＪＰＡ）の活動にあなたも参加しませんか？

正会員

対　象……浄土宗教師・寺族

会　費……年間10,000円

賛助会員

対　象……檀信徒、企業や宗教法人以外の団体

会　費……檀信徒会員　年間　2,000円

法人会員　年間 10,000円（一口）

正会員は、入会時に「私たちは平和を祈念します」と記された会員プレートを贈呈します。賛助会員は、応援に感謝を込めて、会報ダーナに芳名を掲載します。正会員、賛助会員は、スタディーツアーに割引料金で参加できます。

平和念仏募金のご協力のお願い

平和念仏募金は、各ＮＧＯ団体への援助、私費留学生に希望図書を贈呈するブック・ギフト活動、社会参加するお寺を顕彰する浄土宗平和賞などの活動に充てられます。

恐縮ではございますが、何とぞご協力賜りますようお願い申しあげます。

◆平和念仏募金は、浄土宗劈頭宣言にある愚者の自覚に立ち返り、「世界に共生」する平和・環境・福祉・人権などの諸問題に取り組むための募金です。

◆①世界の人々に役立つ、②共に学びあう、③社会にアピールする、④新たな人材を発掘・要請する－との方針のもと、国際的に活躍するＮＧＯ（非政府組織）を支援しております。

◆私費留学生希望図書支援「ブック・ギフト」事業を行い、留学生へプレゼントした書籍の購入費として役立たせていただきます。

JPA 浄土宗平和協会4つ活動

1 平和念仏募金運動
2 ブック・ギフト事業
3 浄土宗平和賞
4 スタディツアー・NGO支援

浄土宗平和協会役員・スタッフ

理事長……川副春海
副理事長……戸松義晴
秋田光彦
理　事……齋藤隆尚
嘉藤哲也
吉水岳彦
深谷雅子
山川正道
大河内大博
堀　眞哲
専門委員……小林正道
茂田真澄
参　与……荻野順雄
監　事……村上真瑞
小泉顕雄
事務局長……池野亮光
事務局……山口洋典
大崎信久
霜村真康

ご希望の方には詳しい案内の掲載された協会のパンフレット（入会用振込用紙つき）を同封いたしておりますのでご利用ください。

浄土宗平和協会（JPA）
〒605-0062 京都市東山区林下町400-8 浄土宗人権同和室内
電話075-525-0484 Fax075-531-5105

連絡・問合せ先：浄土宗平和協会事務センター
〒543-0076 大阪市天王寺区下寺町1-1-27
電話06-6771-7641 Fax06-6770-3147 メールjpa-info@jodo.or.jp
郵便振替口座【01020－5－16369　名義：浄土宗平和協会】